

ミドルメディアとは？

どんな言葉で科学と市民をつなぐか

(2013年04月20日 @JAMSTEC)

背景には、不安、痛み、焦燥.....

- 東日本大震災＋福島原発事故
 - ガバナンス、コミュニケーションの失敗
 - 責任ある科学者・技術者の遁走
 - 無責任な「学説」の氾濫 → 社会的混乱
 - 科学と技術 社会的信頼失墜
- 一方で → 傷つく人たち、不安、焦燥、
乖離を修復できないか——

1. マス・メディアの可能性と限界

- できること → 「マス」の大きさ
大量伝達、総合情報の提示（相場観）
- できないこと → 時間限定編集（ニュース）
社会、圧力団体への配慮、メッシュの粗さ
- 「マスコミ」の中味 → 報道から娯楽まで
新聞、NHKニュース、週刊誌、TVワイドショー
- もっと小さなサイズで → ミドルメディア

2. サイエンス・コミュニケーション政策

- 「科学技術理解増進」、「リテラシー向上」
- 2005～2010年、北大、東大、早稲田大etc...
- 成果? JST、科学技術政策研究所、大学...
- 果たして、人々の痛みに向き合えたのか?
- 求められた時に、役だったのか?
 - 研究とは?(調査、データ分析、論評...)
 - 現場に立脚した実学がない

この反省に立つプロジェクト

共通の思い.....

- 混乱し、当事者同士が互いに傷つくような場
- なぜ、言葉や思いが伝わらないのか？
- どうすれば科学の言葉を伝えられるのか？
- 専門領域を超えるインタプリターが必要だ
- しかも、現場に軸足を置いたプロジェクト
- 「ミドルマン」という役割、これから不可欠
- 焦点は → “トランス・サイエンス領域”

顔が見えるサイズで……

- Finland、Swedenの核廃棄物処理行政
- 「キッチン・トーク」の積み重ね、女性が語る
- 高速増殖炉「もんじゅ」事故→事件（1995年）
- サイクル・ミーティング（旧動燃）
- いずれも、顔が見える、こころ、人柄が伝わる
- 冷や汗をかく技術者、「おばあさん、今の話し、分かりましたか？」 → 体温が伝わる

ミドルメディア・シンポジウム

- **コンフリクトの現場**に議論のベースを置く
- 参加者同士、**お互いに顔が見えるサイズ**
- 当事者に、状況、困惑、不満、願いを聴く
- 何が一番の課題か、浮き上がらせる
- ひとつずつに、背景を知る
- たとえば、こんなやり方をしたら.....
- → **コンフリクトの現場には、共通項がある**



ミドルメディアは、福島第一原発事故をきっかけに、「生活のことば」で科学と社会をつなぐ大切さを実感した市民による、新しいコミュニケーションの手法です。

さまざまな領域で、私たちは科学と社会の“きしみ”を感じています。当事者の視点、現場の痛みを、顔が見える距離（マスではなくミドルレンジ）で共有し、立場の違いや専門性の壁を越えて交流する場を作りたい。そこで生まれた智恵や知見を広めたい。その実現を目指す活動です。

2013年1月20日、日本科学技術振興機構（JST）、筑波大学、日本サイエンスコミュニケーション協会（JASC）などの共催で、小規模なシンポジウムを開催し、第一歩をスタートさせます。同じ思いを抱く方々の参加をお待ちします。

ゲストスピーカー：

松井 史郎
福島県立医科大学 特命教授

高村 美春
南相馬市在住 主婦

遠藤 清次
絆診療所（南相馬市）医師

モデレーター：

小出 重幸
科学ジャーナリスト

日時：2013年1月20日（日）13:30~17:00

場所：筑波大学 文京キャンパス
東京都文京区大塚 3-29-1

日本サイエンスコミュニケーション協会の第7回定例会と兼ねて開催します。

事前申し込み受付中

申込み・問い合わせ先：<https://www.sciencecommunication.jp/>

ミドルメディア・ キックオフシンポジウム

生活のことばで科学と社会をつなぐ

主催：ミドルメディア実行委員会ほか

ミドルメディア・シンポジウム 2013年4月14日



Shigeyuki Koide

福島県甲状腺検査（2011年10月から）

- 放射性ヨウ素の放出
- 内部被曝による甲状腺発がんのリスク
- 現状を把握する必要、経過観測、データ集積
- 18歳以下、超音波スキャナーで測定
- 「A2」（経過観察） → 全体の35%
- 「5ミリ以下の結節や20ミリ以下の嚢胞がみとめられるもの」=これが、判定通知の表現

検査の判定結果を受けとって

- 多くのお母さんたちに不安と衝撃.....
- 「A2」 経過観察 → かかりつけ医に相談
- 福島県立医大からの通知、「一元的に実施」
- 地域の臨床医たちも混乱
- 専門性、目の前の患者家族、大学病院
- 福島県、医大、山下俊一医師への批判
→ この混乱、脱出口はないものか.....

まなざしと、手がかかり

- 「検査はやりました」
- 「大丈夫であることを示すためです」
- **これでは、きつとうまく行きません**
- 人員不足など、問題は山積みですが
- 丁寧に診療を繰り返し、共に歩むしかない
- **同じ日本の中でいがみ合って、得をする人なんていないと思います**（坪倉正治 医師）

「情報の救急箱」をつくるミドルメディア

ミドルメディアは、福島第一原発事故をきっかけに、「生活のことば」で科学と社会をつなぐ大切さを実感した市民による、新しいコミュニケーションの手法です。

さまざまな領域で、私たちは科学と社会の“きしみ”を感じています。当事者の視点、現場の痛みを、顔が見える距離（マスではなくミドルレンジ）で共有し、立場の違いや専門性の壁を越えて交流する場を作りたい。そこで生まれた智恵や知見を広めたい。その実現を目指す活動です。

今回は、福島第一原発事故の後、分断されてしまった被災地の地域コミュニティに目を向けます。

ゲストスピーカー：

半谷 輝己

福島ステークホルダー調整協議会
事務局長

神谷 さだ子

日本チェルノブイリ連帯基金

鈴木 達治郎

原子力委員会 委員長代理

モデレーター：

小出 重幸

科学ジャーナリスト

日時：2013年4月14日（日曜日）

13:30～17:00

場所：筑波大学 茗荷谷キャンパス

東京都文京区大塚 3-29-1

参加申し込み（定員50名）・お問い合わせ：

<http://goo.gl/pgN99>

主催：ミドルメディア実行委員会

共催：日本科学技術振興機構、筑波大学、日本サイエンスコミュニケーション協会

第2回

ミドルメディア・シンポジウム

テーマ：放射線の影響と地域コミュニティ

編集作業と公開プロセス

- シンポジウムを文章＋画像＋VTRで公開
- その前提として、**編集作業**がある
- ホームページ(JSTサイトを予定)にアップ
- 一種の「**救急箱**」として蓄積・提供してゆく

立場の違いや専門性の壁を越えて
交流する場を作りたい

情報の「救急箱」

- 不安や痛みを感じた時、開けると、いろいろなクスリ箱が……
- 救急箱を備えてくれたのは、見たこともない「特殊な専門家」ではなく、顔が見える「かかりつけ医」で
- 使ったクスリ箱の隣にも、中にも、また、いろいろな箱があり
- 気がつくと、この救急箱が、科学や社会と向きあう「場」の入り口になっていた……



他にもあるコンフリクト

- 1998年、環境ホルモン・ダイオキシン騒動
- 遺伝子組み換え技術 → 食品？
- 放射線低線量被曝の本当の影響
- 食品残留農薬、添加物のリスクとは？
- 出生前遺伝子検査の臨床導入、交通整理
- 安楽死、脳死にかかわる課題
- 原子力施設・活断層（理学と工学のミゾ）
- 専門分化する科学研究と、統合評価の確立